

ロストロポーヴィチ 人生の祭典

2007(平成19)年5月11日鑑賞(松竹試写室)

★★★★



監督・脚本＝アレクサンドル・ソクーロフ／出演＝ムステイスラフ・ロストロポーヴィチ（チェリスト、指揮者）／ガリーナ・ヴィシネフスカヤ（ソプラノ歌手、ロストロポーヴィチ夫人）（デジタルサイト配給／2006年ロシア映画／101分）

第7章

たまには変わった趣向で

……『人生の祭典』とサブタイトルをつけ、ロストロポーヴィチの人生を描くドキュメンタリー映画だったが、4月23日のエリツィン元大統領の死去に続く、ロストロポーヴィチの4月27日の死去により追悼映画となることに……。大の日本びいきであった「20世紀最大のチェリスト」の死は、実に残念。しかし、ロシア革命、ソ連邦の崩壊そして現在のプーチンの強権政治というロシアの100年史を、今ロストロポーヴィチの人生から学習することはきわめて有益。「チェロを抱えた平和の闘士」の意味を考えながらその死を追悼し、そんな学習を深めてもらいたいものだが……。

3月27日に80歳、4月27日に死去

この映画は、2007年3月27日に80歳の誕生日を迎えた、20世紀最大のチェリスト、ムステイスラフ・ロストロポーヴィチの人生を描いたドキュメンタリー映画。ロストロポーヴィチの人生は、著名なソプラノ歌手であった妻ガリーナ・ヴィシネフスカヤと共に激動のソ連の中で歩んできたものだったが、もちろんドキュメンタリー映画への資料提供ははじめて。

映画には、80歳の誕生日を迎えるロストロポーヴィチの今後ますますの活躍を期待して『人生の祭典』というサブタイトルがつけられていたが、この映画の試写の案内をもらっている最中の4月27日、何とその本人がモスクワ市内の病院で死去したとのニュースが、4月28日の朝刊で一斉に伝えられた。したがって、アレクサンドル・ソクーロフ監督・脚本によるこの映画は、まさにロストロポー

イチを追悼する作品となってしまったが、それもロストロポーヴィチにとっては大いなる幸せ……。

エリツインも死去

ロストロポーヴィチ死亡のニュースが報じられた少し前の4月23日には、ロシアの初代大統領エリツインの死去が報じられた。ロシアは現在、プーチン大統領の下で経済大国、資源大国の道を歩もうとしているが、プーチンの「強権政治」が懸念されていることは周知のとおり……？

1985年以降開始された「ペレストロイカ」によって、ソ連邦の民主化が進むとともに、ソ連邦そのものが崩壊し、遂に1950年代以降ずっと続いてきた「東西冷戦」を終結させたゴルバチョフの功罪や、その跡を引き継いで1991年に初代のロシア大統領となったエリツインの功罪については、さまざまな議論があり、とてもここでは書き切れないもの……。

またソ連邦は、1917年のレーニンらによるロシア革命によって、地球上初の共産主義国家として登場し、その後スターリン、マレンコフ、フルシチョフ、ブレジネフ、アンドロポフ、チェルネンコ、ゴルバチョフ、エリツイン、プーチンと権力が移行していったもの。したがって、1927年生まれで、1950～60年代にかけて既にチェリスト・指揮者として名声を得ていたロストロポーヴィチが、こんな激動するソ連邦の中で生きていくことは大変だったことは明らか。この映画を鑑賞し、解説を読んだ中、そんな視点から少しテーマを整理しておこう。

ソルジェニーツインとロストロポーヴィチ

西ヨーロッパとはいろいろな意味で趣の異なるロシア文学だが、そのレベルの高さにおいては全く引けをとらないもの。ロシアで最も有名な作家はトルストイとドストエフスキーだが、20世紀最大のロシアの作家は、『ガン病棟』や『収容所群島』で有名なソルジェニーツイン。ちなみに、彼は1970年にノーベル文学賞を受賞している大作家。しかし共産主義国家ソ連邦では、「表現の自由」は保障されていないため、彼は1964年のフルシチョフ失脚後、「反体制派知識人」と見なされ、1974年には逮捕されたうえ、国家反逆罪でトロツキー以来45年ぶりの国

外追放処分を受けることに……。

ところが、ロストロポーヴィチは当局からそんなに迫害されていたソルジェニーツィンを擁護すべく当局に抗議する公開質問状を書いたり、4年間にわたって自分の別荘に匿ったりした。そのため、当局の迫害はロストロポーヴィチとその妻ヴィシネフスカヤにも及ぶことになり、ロストロポーヴィチ夫妻も遂に1974年には、ソ連邦から西側に亡命せざるをえないことに……。

ショスタコーヴィチとロストロポーヴィチ

文学だけではなく音楽においても、ロシアのチャイコフスキーはクラシック音楽界の最高峰に立っており、決してベートーヴェンやモーツァルトなどの西ヨーロッパの音楽に引けをとるものではない。そんなロシア音楽の20世紀の天才がプロコフィエフであり、ショスタコーヴィチ。そして、ロストロポーヴィチはこの2人を天才と評価し、自分の師匠と仰いでいたもの。

ところが、このショスタコーヴィチもソルジェニーツィンと同じように「反体制知識人」とされたから大変。私も弁護士登録直後にLPレコードを買い漁っていた頃、ショスタコーヴィチの交響曲全集を購入したが、最も有名な『革命』というタイトルがついた交響曲第5番はそれ以前からよく聴いていたもの。ロストロポーヴィチがアメリカへの亡命中、ワシントンのナショナル交響楽団を率いて自ら指揮したショスタコーヴィチの交響曲第5番は、名盤中の名盤。

激動のソ連邦の近代史の中であって、ロストロポーヴィチがいかに激動の人生を歩んできたかは、これを見ても明らか……。

世界のオザワは、ロストロポーヴィチの弟子……？

イチローや松井秀喜は大リーガーとして一流選手の勲章を手に入れているが、「世界の」という冠にふさわしい野球選手は、王（貞治）をおいて他にいない。ゴルフ界におけるそれは、世界の青木（青木功）であり、音楽界においては、やはり世界のオザワ（小澤征爾）だろう。この映画で紹介されているロストロポーヴィチの人脈の広さは驚くばかりだが、小澤征爾とロストロポーヴィチの芸術家同士の親交の深さは、自他共に認めるもの。

この映画後半のメインは、ペンデレツキのチェロ協奏曲をロストロポーヴィチのチェロ、小澤征爾の指揮、そしてウィーン・フィルの演奏でリハーサルしている風景。これは、ウィーン・フィルのコンサート本番のシーンを使うについては、さまざまな法的規制があるうえ、リハーサルシーンの方がかえってロストロポーヴィチや小澤征爾のナマの姿が見えて面白いという判断にもとづくものらしい。

1927年生まれのロストロポーヴィチと、1935年に満州国奉天市（現在の瀋陽）で生まれ、関東軍参謀の2人の重要人物、板垣征四郎と石原莞爾から一字ずつもらって征爾と命名された小澤征爾は、わずか8歳違いだが、小澤征爾は明確にロストロポーヴィチを自分の師と位置づけていたとのこと。そんな2人の関係がこのリハーサルシーンによってバッチリと……。

ロストロポーヴィチは親日家で大の日本びいき……

チェロ奏者であり指揮者でもあるロシアのロストロポーヴィチの名前は、私が弁護士になりたてで、LPレコードを買い漁っていた時期から私でもよく知っていたのだから、1970年代において、ロストロポーヴィチの名前は日本でも広く知れ渡っていたはず。そんな親しみもあり、かつ哀悼の意味もかねて、私はこの映画の試写には是非行かなければと思っていたのだが、映画を観て、ロストロポーヴィチが大の親日家で日本びいきだったことを知ってビックリ……。

とりわけ、彼は相撲が大好きで、元横綱千代の富士の大ファンであり、2人はごく親しい間柄とのこと。したがって、プレスシートには「スラヴァ（ロストロポーヴィチ）は、音楽においても人生においても、私の兄貴分である。彼からたくさんのことを学んだ」という小澤征爾のコメントに続いて、「人の中にこそ芸術がある。私は彼のチェロ演奏を決して忘れない」という九重親方（元横綱千代の富士）のコメントが……。

こんなすばらしい金婚式ができれば……

映画前半は、ロストロポーヴィチとその夫人ヴィシネフスカヤの金婚式を祝うパーティーの様子が描かれるが、そこで驚かされるのは、ロストロポーヴィチの人脈の広さ。激動のソ連邦で生き、1974年にアメリカに亡命し、1990年に再び祖

国の土を踏んで名誉回復を果たしたロストロポーヴィチの80年間の人生が、波瀾万丈のものになったのは当然だが、その中で彼がこれほど多くの人々と親しくなれたのは、何よりもその人なつっこい人柄によるもの。

そんなロストロポーヴィチの人柄が、アレクサンドル・ソクーロフ監督のインタビューや演出の中、スクリーン上にくっきりと浮かび上がってくる。何ともほほえましいのは、出席者全員の祝福を受けて、夫人の頬にキスの雨を降らせるロストロポーヴィチの姿。金婚式を迎えることができる夫婦がどのくらいの確率でいるのかは知らないが、この映画に収められたロストロポーヴィチ夫妻の金婚式のパーティー風景は、まさに歴史に残るすばらしいもの。私たち夫婦もあと何十年後には、これには遠く及ばないにしても、友人・知人を招いたすばらしい金婚式パーティーを開かなければ……。

🎬なるほど、なるほど……

この映画後半は、ロストロポーヴィチと小澤征爾のリハーサル風景に並行して、56歳で引退したヴィシネフスカヤ夫人が音楽学校の学生にオペラ（声楽）の指導をしているシーンが映し出される。私のこの評論では、ヴィシネフスカヤ夫人のことは省略しているが、夫人の功績とロストロポーヴィチとの絆の強さについては、是非あなた自身が映画を観て理解し、感じてもらいたいもの。

そんな夫人との絆を含めたロストロポーヴィチの80年間の人生をこのドキュメ



ンタリー映画で観れば、「20世紀の最も偉大なチェリスト」と呼ばれたのは当然として、なぜ彼が「チェロを抱えた平和の闘士」と呼ばれたのかについても、なるほど、なるほどと納得できるはず……。

2007(平成19)年5月12日記

写真提供：デジタルサイト、©フィルムカンパニー、ステルフ、スタジオ・バーレク、スヴァログ・フィルム